

SCHOOL INTERVIEW!

登校インタビュー

絵本作家
鈴木のりたけさん
Suzuki Noritake



浜松北高の教室で。「母校には甘酸っぱい思い出が多過ぎる。こうしているだけでいろんな思いが一気に押し寄せて、むせかえりそう(笑)」と鈴木さん

—— 母校を訪ねたのは久しぶりとのことですが、鈴木さんは高校時代どんな生徒でしたか？

僕は田舎の中学校出身だったので、高校に入学して、いきなり大きなカルチャーショックを受けました。同級生がオシャレで個性的なヤツばかりだったので、僕なんか光っている人間でも何でもなくて、ごく普通の生徒でしたよ。音楽、服装、麻雀……いろんなことを友だちから学びました。自転車に乗る時も、前のカゴにカバンを入れるとオシャレじゃないから、カラにして乗った方がいいとかね(笑)。

—— 高校時代の思い出は？

僕が所属していた軽音楽部は、北高の自由な学風が凝縮された実にアウトローな部活で、すごく居心地がよかったです。北高は学校行事も盛んで、3年次のクラスは体育祭も合唱大会も総合優勝しました。体育祭の時、僕は応援用の舞台(デコレーション)を作るリーダーだったんだけど、前日徹夜で作り続けてたもんだから当日はフラフラで、何の種目にも出ずにグダーっとしてました(笑)。

—— 当時から絵の勉強を？

僕はこれまでに絵を学んだことは一度もないんです。小学校時代にノートの隅っこに描いたキン肉マンやドラゴンボールの絵を友だちにほめられた程度で、特別に絵が上手かったわけでもないしね。

—— では、絵本作家に至った経緯は？

大学を卒業後、一般企業に就職したんですが、自分のやりたいことは違ったので2年で辞めてしまったんです。その後、サブカルチャー誌を発行したくてグラフィックデザインを独学で学んだのがきっかけで、デザイン会社に就職しました。そこでの8年半は、絵でコミュニケーションする方法を学んだり、カッコいい写真や絵を見たりして、いろんなものをインプットする期間でした。

それで、今から10年前からかな、自分で絵を描くようになったんです。その絵をまとめて絵本にしたら賞をもらって、絵本の制作を本格的に始めました。当時は会社と掛け持ちだったので、終電で帰宅して0時から3時頃まで絵を描いて、朝9時に出社するという生活でした。もう二度とあの頃には戻りたくないな(笑)。

仕事場って、パーソナリティが表れて面白い！ 面白がるクセをつけると、想像の窓が開く。

働く人の仕事場を生き生きと描いた「しごとばシリーズ」など

数々の人気作品を手掛ける浜松市出身の絵本作家・鈴木のりたけさん。

母校の浜松北高で、高校時代の自分や現在の仕事について話を伺った。

—— いろいろな職業の仕事場を描いた「しごとばシリーズ」が好評ですが、この発想はどこから生まれたのですか？

当時僕が働いていたデザイン会社って、自分の机のパーテーションに好きなアーティストの写真を貼ったりして、みんな自分のお城みたいに仕事場を大事にしていたんです。それを見て、「仕事場ってパーソナリティが表れて面白い。仕事パーソンナリティなんだな」と気付かされました。職業の違いによっても個性が出るし、その職業に携わる人自身の個性も出るのだから、いろいろな仕事場をテーマに絵本を作ろうと思えました。





浜松北高
出身

Suzuki Noritake

1975年生まれ。浜松市西区大人見町出身。浜松北高校を卒業後、一橋大学 社会学部に進学。卒業後はJR東海、グラフィックデザイナーを経て絵本作家に。著書に「しごとば」シリーズ(プロンズ新社)、「ほくのおふる」(PHP研究所)など。第17回日本絵本賞読者賞、第62回小学館児童出版文化賞を受賞。平成27年度に「浜松ゆかりの芸術家」として浜松市の教育文化奨励賞も受賞。8歳、6歳、4歳の子どもの父。

部室へ行く道すがら、体育館をのぞく。「昼休み、バスケットたな」

——今の高校生たちが将来を考えると
きに、何かアドバイスするとしたら？

まず一つ目に、「面白がりなさい」。勉強も、仕事も、何でも面白がらなきゃ続かないと思うんです。たとえば、僕が「すべりだい」という絵本をどんなふうにしたかという、遊びに行った公園で「これ、なんていう木？」って子どもに聞かれたとき、僕が「プラタナスだよ」ってちょっと嘸みながら教えたんですよ。そうしたら「プラタナス、ナス、プンプ

……」って子どもが一日中はやし立てて笑い転げてるわけです。それを見て、子どもってこんなことで一日中笑えるんだ……って気付いて、それなら「意味はさっておき、問答無用に楽しい言葉遊びの絵本を作ろう！」と思ったんです。それで、「すべりだい」という言葉をどれだけ遊び倒せるか真剣に考えて、逆から「いだりべす」って読むと、「何だか外国の女王様の名前みたいだな」とか、「すりべいだ」と文字を入れ替えると、「宇宙映画の悪役みたいだな」とか、いろいろ手をかけて面白がるようにすると「想像の窓」が開くんですよ。そうやって「面白がるクセ」を身につけて想像力を磨くことが大事なんです。

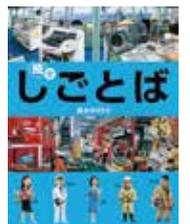
もう一つ言いたいのはね、「分かって楽しいじゃん」。分かることの楽しさに気付くと、あとは自らの好奇心を満たすために行動するようになる。そうすれば、動けば動いたなりの結果がついてきます。面白がること、分かる楽しさを
知ること。あとは自分の人生を楽しめればそれでいいんじゃないかな。

——絵本作家という仕事は鈴木さんに
とってどのようなものですか？

自分がやりたいことをやれて、「天職を得た！」……と、思いかけた時期もあるんですが、そう思ったら終わりだっという気がするんです。だから、常に何にでも対応できるフレキシブルな自分になりたいですね。高校生の皆さんも、どんなに苦況に立たされたとしても、客観的に自分を見つめて笑えるような精神的余裕を持って、臨機応変に人生を楽しめる度胸を身に付けてほしいです。



取材で得た刺激を興奮が冷めないうちに絵にして、面白味をストレートに表現することにこだわる鈴木さん。サインの際もササッと楽しいイラストを描き添える



『しごとば』は、実際に鈴木さんがさまざまな職場を訪問・取材し、職場全体を表現したシリーズ。『すべりだい』は、言葉遊びからすべり台の形を想像したらこうなった!? すべり台を「遊び倒す」一冊